

---

# **学園奇譚 サイン**

コニ・タン

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園奇譚 サイン

### 【Zコード】

Z9884D

### 【作者名】

ロニー・タン

### 【あらすじ】

【この小説は「学園珍事ファミリア！」の番外編です。一応これだけでも読めるようになっていますが、本編への伏線が大量に含まれています】天下無双学園一年一組、赤坂響玖あかさかひびくが主役の物語。どうしようもないほど弱い力を持った者と、どうしようもなく強い力を持つた者による、ただ仲良くなるためだけの物語。【「学園珍事ファミリア！」を読んでいない方へ。この話は何でもあります、SFからファンタジーから何でもこいです。という訳で作品内の組織の問題などは気にしないで下さい】

(前書き)

戦闘描写はあえて薄めにしました、本編よりも好き放題やつてみた感じです。

一年二組は今日も平和だ。

隣のクラスではなんだか小学生にしか見えない子が転校してきたり、なんか二重人格じみた人が居たり、お嬢様が一人も居たり、あとなんか憐れな馬鹿が居たり、色々あるらしい。

でも、一年二組は平和だ。

平和、だつたんだ。

＊＊＊

「響玖<sup>ひびく</sup>セー、なにやつてんだべセー」

ふ、と。

中空を漂っていた意識が、クラスメイトの声で自分に戻る。こつこつ時つて妙に現実感が薄くなるんだよな。

確認しよう。俺は赤坂<sup>あかさか</sup>響玖<sup>ひびく</sup>、天下無双学園(高等部)一年二組の生徒だ。

目の前に居るこいつは空井<sup>からい</sup>映恵<sup>はえ</sup>。

確か田舎の方からこの町まで下宿してきた女生徒で、セーラー服にはとんと似合わない野球帽を常にかぶつてる変な奴だ。

「上の空……か。赤坂さんは馬鹿馬鹿しくて俺等の話が聞けないらしい」

たつた今、皮肉な言い方をした「ドイツは近江谷おうみがたに 恋哉。一応友人。

よ～しょ～し、現実感湧いてきたぞ。今は昼食中だ。

そんでこの一人と馬鹿話してて……途中で眠くなつて……あー、半分寝てたわ。

「すまん、一人とも。ドーテモイイ話だつたんで軽く聞き流した」

寝てた、とだけ言つのもなんか面白くないので引っ搔き回してみる。

「ジーでもいいだなんてことわなこべや！ あたしりやあ真剣にばなあ……」

なんかこの方言つて適當臭い感じだよなあ……。

たまに映恵の出身地を聞きたくなるが、聞きたくない気もする。

「抑えろ空井、コイツはお前をからかつて楽しんでいるだけだ」

「ぬあ！？ なげにそんな事するがや、響玖～！～！」

あー、コイツ面白田。常にテンション高にからちよつと言えれば勝手に暴れだすんだよな。

「いやいや、俺は面白い事なら努力は惜しみませんぜ？ そして映恵の反応は限りなく面白いからしょーがないんだ、悔しかつたらテンション上げてみやがれ田舎娘！」

「むがー！ セザバ」と言つたつてあたしゃ「これが元々やげな！」

映恵が俺に鉄拳制裁を加えようと立ち上がる。

だがそんなものを易々と受けける響玖様ではない！ 貴様ごときが  
我が俊足についてこられると思うてかフウアハハハハハハハハ……！

「逃げんでないわぞー！ 」のーー！」

「ひやつはつはー！ 悔しかつたら捕まえてみろー！ むしろ悔しくな  
くても捕まえてみやがれヒヤツハー！」

俺は今、教室を駆け抜ける一陣の風に……

「うぬやござお前り」

「「はー、すいません」」

数分後、俺と映恵は怜哉にこいつづく叱られていた。  
いや……だつてさあ……怖いよ、コイツ。なんだよ、叱る時は恐ろ  
しそざるよ、お父さんか、お前は。

「な・に・か！ 余計な事を考えなかつたか……？」

「イエ、ナンデモガイヤセン」

「こ、怖～。

「はあ……まつたく。ほひ、ひとつと飯食つわ」

怜哉の許しを得た俺たちは急いで自分の弁当にかぶりついた。

「んぐんぐ、もぐもぐ……所で、わざの結局何の話だったんだ？」

「んまんま、『ぐぐぐ』……あれだべさ、卯月さんだー」

「お前ら、食いながら喋るなよ……行儀の悪い……」

「とりあえず怜哉はA」<sup>おまけ</sup>無視つて事で。  
で、卯月さんねえ……。

「卯月さんがどうかしたのか？」

「こやあれ、ビデオせん事が問題なんじやあちゅう事がや

まあ、確かにそうだな。

卯月さんってのはウチのクラスの卯月<sup>うづき</sup>姫紀<sup>ひめき</sup>つていう女生徒の事だ。  
別に特別目立つ姿とかそういう訳じゃないんだが（普通に可愛い  
が、俺の目から見ると）、クラス中でもう彼女の名を知らない奴は  
居ない。

彼女は　喋らないのだ。

「卯月さんばあ、こん前、当直ん時も全然やがったかあ、女の子で  
あんまよく思われとうなにがや」

「イシの方言はまったくよく分からぬが、とりあえず要點だけは  
伝わった。

女性は怖い、内輪には限りなく優しいが輪を外れると本当に怖い。  
まあ、映画のようなものも居るしその限りではないのだが、やはりクラスの大半がそんな仲間意識の強い方々だろう。

「まあ、そういう訳で卯月を俺らの仲間に引き込もうと思つてな。  
これで男女比も合つだろ？」

「引き込むだなんてさあ、人聞きが悪いやあ。ながよへできりゃあ  
それで良かと」

まあ、傍から見ても分かるとおり、俺たちはなんだか妙な集まりだ。  
初めは俺が田舎から出てきたばかりの映恵をからかいまくつていた  
ら、いつの間にか怜哉が俺を注意するようになつていた。

それ以降、何の流れかは知らないが昼飯を一緒に食うぐらじの仲になつている。

まあ、そんな俺たちの輪に居れば周りからの被害も少ないと、こいつ等は考へてゐるようだ。

「良い奴だなー、お前ら」

「おうともせ」「だべ

二人は一様に頷く。

まあ……面白そうだしな。喋らない女の子なんてなんだか訳アリつ  
ぽくて良い感じ。

「ひ~び~く~、また面白こやうなんやうば考へとよつたばな?」

「んあ? しゃーねーよ、それが俺の生きる理由だし。マイライフ  
トウ暇潰しですよ?」

英文法が合つてるかなんて気にしない。……一部の読者様、ここで

俺が他作品のネタ使つと思つただろ?

ちょっと使いたかったけど、期待を裏切る方が楽しいから使ってやらねえ。

「はあ～、響玖もなんば役だづ事、考えんきに～よ～。阿呆な事ばつがり氣い回しどってからに～」

「仕方ない、赤坂のこれは生まれつきだ。生まれつき素晴らしいものを持つている人間も居れば、コレの様に下らん存在も生まれたりする……おお、神とはなんと不平等なものか！」

そこで俺の反撃を見越した怜哉が椅子から腰を浮かす。……だが、俺は別の事を考えていた。

「生まれつき……ねえ。そんなに良いもんじゃねえぞ？」

「「は？」」

あ、やつべ。

「こ、いや、……テレビとかでさー、よくやつてるじゅん、天才の苦惱的な…」

多少不自然なつなぎだったが、目の前の一人は顔を見合わせ、頷き合い、

「響玖にや一生関係無い話だがや～」

「まつたく……電腦などに毒されおつてからに……」それだから馬鹿者は……」

ちょっと殴つてやるうかと思った。

＊＊＊

まあとりあえずそういう訳で、赤坂 韶玖という人間は特殊能力を持つている。

まあ、特殊能力の基準が「普通の人間がどう努力した所で得ることの出来ない不思議な事を引き起こす力」全般を指すのなら だが。どういう原理かも、どういう方法かも、どういう理由でかも知らない特殊能力。

俺は、何も無い所に字を書くことが出来る。

人を笑顔にする事もその逆も、利益を得る事もその逆も、人を生かす事もその逆も出来ない、人畜無害で利益皆無の特殊能力だ。

(まあ、人によつてはメルヘンとか思うかも知れんが……)

指を使い、宙に「あ」と書く。

すると指に追従するように青白い光の線が現れ、「あ」を形取つていいく。 が、

「…………ふはあ！ やつてらつれか！－」

疲れるのだ、これは。

そんなに文字を書きたいなら鉛筆を買えばいいし、光らせたいなら懐中電灯でも買えば良い。  
なんだかとつても割に合わない力だった。

と、悪態をついていいると、

「…………」

田の前に、少女が居た。

きつと染めた訳ではないだらつ栗色の髪が風にはためき、それ自体が風を象徴するようになはためて居る。

同じような色の田が怯えるような、それでいて興味があるような色でこちらを眺めており、なんだか悪い事をしたような罪悪感に悶り始めた。

「いや、問題ないじゃない。

「えへっと……卵田さん？」

「クソ」と、少女の首がゆづくとドドガつた。

「あー、思い出した。」  
中庭にはよく卵田さんが居るとこ  
ので様子を見にきたんだ。  
そしたら屈なくて……ちょっと待つてみよつて氣になつて……や  
つてるうちに暇になつて……そんで毎飯の時の事思に出してたまに  
はやつてみよつかと……

「あの、あ、あー……見てた？」

また同じようにゆづくと首が動く。もしかん縦にだ。  
それから、まつさつとした指が俺の田先の空間を指す。

「ん?…………つむりあー?」

田の端にあるのは半反呑の「あ」。

俺としたことが……消し忘れてるじゃねえか、こりや見つかって当然だ。

「あ」に手をかざして少し肩の力を抜く、すると文字は搔き消えて  
いった。

- 1 -

少女、もとい卯月さんが驚いたような顔をする。

正直、能力のことは誰にも知られたくない、まあ大した理由は無いけど騒がれるのも嫌だし。……卯月さんも現在進行形で驚いて

「なあ、卯月さん……これ、内緒にしといてくれない?」

すゞく微妙な具合に首を傾げられた、可愛いじやねえかコンチクシヨー。

「……じゃなくて！ 色々驚かれたり避けられたりどこのその博士の研究材料にされるのは嫌だから、黙つててつてお願いしてんの！」

こつくりこつくりと首を左右に何度も傾げ、その後空を見上げて、  
しかる後困り顔。

天然系か？

「だああああああかあああありああああああ！」 Hey!  
Don't speak this! Are you OK? はい

かなり英語を間違ってる気がするが気にしない。そして意地でもアレは使わない。

そして対する卯田さんは……

「…………」

「……」「三歩引いてから「ククク」と頷いていましたわ。  
これさあ……俺だって恥ずかしいんだよ！？ 中庭中央で英語叫ぶ  
つて……ちょっと響きだけ愛を叫ぶアレに似てるじゃねーか！  
もつとれあ……じつ……卯田さん疎らないから親指立てるだけでも  
いいからさあ……もつとほつてくれよー

「はあ……いやまあいいや……卯田さん、暇？」

そんなジリジリと下がっていくなり下せいお願いします。  
そんなにか？ そんなに俺は変質者に見えるのか！？

「こやこやこや、ただちょっと暇ならー、……暇ならー……」

ヤバイ、どうしよう？

お毎一緒に食べよう？ ……駄目、もつ食つてるし。

今度の日曜遊びに行こう？ ……無理、馴れ馴れしそめる。  
ちゅうと付いてきて？ ……不可、本格的に変質者に成り下がつて  
しまわ。

少し諂ひでもする？ ……君のナンパ師だ。

とか、俺が苦惱こくれていると……

「んあー？ 韶玖ー？」

「あ、ナイスタイミングだ映恵」

映恵が来た。……卯月さんはまた2、3歩引いた。

「そりやあね、映恵は見た目変だし口調変だし引かれるのは仕方ないけどさあ……」

「響玖（ひびくさき）へ、あんたにだきやあ変とか言われたくなべさー！」

あつや、口から出てたか。  
まあどうあえずそんなことはどうでもいいんだ、今の問題は卯月さん。

「映恵、卯月さんに適当に話しかけてくれ。女同士のがやりやすいだろ」

映恵は了解、と言しながら軽く敬礼すると卯月さんの方へ向かつていった。

たどり着いて……なんか話して……変な動き、つか手話？……いや手話やつてるの映恵だけだ、あいつ何やつてんだ……あ、なんか動きがあおげたに……手をコラコラ動かして……お、虚空をたたき出したぞ……って

「誰がパントマイムやれと言つたか！－」

靴を脱いで映恵に投げつける、スローンとこう良い音がした。

「え……明日の伝達事項は……あ、うふふ……昨日の……、昨日

\* \* \*

が明後日で……」

現在、終わりの方の**ホームルーム**H.R中。

普通ならばすぐにでも帰る事ができるのだが、担任教師の白佐賀しらさがはたまに大宇宙の電波を受信したりするので、長引く事もある。今が正にその状況だ。

「はあ～

ため息をついて横を向くと卯月さんの姿が目に入った、卯月さんもこちらを向いている。

お互に見つめ合い、そして苦笑。

あの中庭での一件、映恵との漫才が功を奏したらしく卯月さんも話を聞いてくれるよつになった。

……どうしてアレがうけたのかよく分からないうが。

「なあ、赤坂」

と、後ろの席の怜哉が、小声で話しかけてきた。

「ん？ どした？」

顔を少し後ろに向けて話す、受信中の白佐賀はこの程度のアクションならば気づかない。

「卯月と仲良くなれたのか？ 空井とも少し親しげだが

んー、という生返事とともに頷きを返す。

「わうか……いや、今さらなんだが卯月と話る時は注意しろ。そし

て絶対に彼女に言葉を発せらるな』

「それは、またお前の仕事関係か？」

この町では未成年であろうと仕事が出来る、という事で映恵も怜哉も仕事をしている。俺はバイト程度だが。

「まあ、そんな所だ。俺や映恵が居る時はまだいいが……というか  
映恵、もしかしてアイツは知らないのか……？」

俺への注意だつた怜哉の言葉が、尻すぼみに自問へと変わつていつた。

ヤハニヤヤシレニ事性レニ  
キレナリテ不善社の今奴ガ

「うふふふふ～……これにて～終～……ドリンクダちゃんにお水をあげて」なこと～

白佐賀の電波が終わり、学校が終わつた。  
ちなみにドリンダちゃんがなんのかを考えたら負けだ。

「おっしゃー！ 児田さん、一緒に帰るでやー。」

映恵かいの一一番に卯用さんの机に飛ひつく、卯用さんは驚いて仰け

「こつも思つんだが、映恵つてたまに良い動きするよな」

「まつたく、馬鹿が……」

怜哉が頭を抱えながら悪態を吐いた、誰に向かつてかは分からぬが。

まあとりあえず、卯月さんは映恵の言葉に頷いている。

俺たちももちろん一緒に帰つてるので今日は4人といつ事になるな。

「しゃーー・帰る野郎どもーー！」

「野郎は響玖と怜哉だきゃあな」

そのシシ「」は許すとして、相変わらずお前はビリ玉身だ。そんな他愛の無い事を思いつつ椅子から腰をあげる、怜哉もまた同様。

「じやー、帰るかー！」

俺が言つと卯月さんも映恵も頷き、俺たちも出口に向かって……って

「ありや？ どしたの？」

怜哉に問いかかる。アイツは何故か俺たちとは逆方向に進んだ。

「報告だ、あのお嬢様に報告を怠ると消されてしまうからな

怜哉はやつ言い、肩をすくめて見せた。

ま、そういう訳で両手に花です。

「んー……なんといつか落ち着かん……」

両手に花、男なら一度は憧れる状況だが、実際なつてみると微妙に  
気まずいなと体験者談。

「卯月ちゃんって誕生日はいつ頃だや?」

卯月さんは指で〇を示し、その後1、6と示す。

「8月16日かや。誕生日になりやあたらプレゼントでも渡すばあ  
な」

……会話成立してゐるなあ。

うん、手の動きだけでも十分話せるんだな。……なんか自分の能力  
が余計役立たずと思えてきた。

「響玖一、卯月さん頼むや」

と、軽く落ち込んでいると映恵が「ちらり」声をかけてきた。

「ん? 頼むつて何? この子をお願いしますで嫁入り確定?」

「アンタの嫁には誰もなりたきや無いわ。ちよつといと私も仕事があ  
るから途中までだべ」

と、学校のある丘の上を指す映恵。

映恵は巫女の仕事をやってたりする、まあ基本事務らしいが。

「ん、そうか。じゃな」

「卯月さん襲うなやー、響玖ー」

「何を言つか。俺は理性の塊だぞ」

役者のように両手を広げて言つと映恵は疑わしげな視線を向けてきた、失礼な。

まあ、そういう訳で映恵は走り去つていつた。

「んじゃ、帰るか……卯月さんの家、どっちへ？」

といつあえず今日は家の方向が違つても送つていいくつもりだ。  
普通なら誘つた映恵が送るのだろうが、その映恵も俺を信頼して任せたのだろうし。

……ひょっと深読みな気がしないでもない、映恵は結構馬鹿だし。

と、気づけば卯月さんは手で方向を作つていた、どうやらひょとつてから右の道に向かい……ああ、小鳥遊町か。

俺の住んでる所は志乃崎町なので逆方向、まあ俺の心がけが無駄にならなかつたつて事で。

そして俺たちは再び歩き出した。

「…………なあ、卯月さん」

声をかけると、彼女は少し首をかしげて僕の言葉を待つた。  
その顔は女神のようでもなんでもなく、ただの少女の顔だ。  
本当に 誰かと比べても同じような顔なのに。

「…………やっぱ、なんでもない」

うん、聞くことじゅくなこよな。

びつして、喋らないかなんて。

\* \* \*

「次社長、卯月との接触を持ちました」

男の 近江谷 怜哉の声が壁に反響する。  
この場所はそれ程度に静かだった。

ここは 生徒会室。

「続けなさい」

促す声はあどけない少女のようで、しかし確かな威厳と威圧を放つていた。

金の髪に青い目、長い髪はクルクルと縦にロールされており、服装は青いパーティードレス。

その容姿は正に「人形の様」であり、どこか作り物めいた印象さえ感じる整った顔立ちだ。

この学園そんな服装の人物は怜哉と同い年の小鳥遊 灯夜たがなし ともよとその姉ぐらいで、そしてこの場にいるのは姉の方だ。

小鳥遊 鷹子たかこ、小鳥遊家の継承者であり、既に数部署の経営を任せている才女。

しかし、怜哉はいつも違和感を持つのだが身長だけは小学生並だ。この学園には人の身長を縮める成分でも含まれているのかと思つ、教師にも小さいのが一人居るし。

余計な思考を頭の片隅に追いやり、怜哉は報告を続ける事にした。

「はい、とりあえず俺と赤坂、空井と二人分で接触しました。現在は空井、赤坂の両名と下校しているはずです。……しかし次社長、どうして一生徒に護衛を？」

次社長、表向きは何の仕事も持っていない彼女だが、その言葉は彼女の立場をストレートに表していた。

そして怜哉の仕事とは小鳥遊財閥、この「」時世に未だ財閥とさえ呼ばれている総合企業の社員だ。

その立場の差を知りながら彼は質問する。

自分のプライベートを割いてさえ、大切な友人すらも巻き込んで、そこまでして見張らなければいけない彼女は何者なのかと。

「機密、といつにして頂けるとありがたいですわ」

それを受け、一回りと微笑みながらも拒絶を示す言葉。

彼女の拒絶はいつも易しい、その理由はといえば必要が無いからだ。言い難いわけでも遠慮するわけでもなく、彼女がやんわりとでも拒絕すれば誰であろうと従わざるをえない、小鳥遊 鷹子とはそういう生き物だ。

「……とりあえず、今日の所は空井がついているので無事でしょう」

怜哉は言いたい事を飲み込み、報告を終える。

息苦しい時間はこれで終わりかと怜哉は心中でため息をついたが、思わず事が起きた。

報告を終えたそのタイミングで、鷹子がとんでもないことを言つたのだ。

「無事ではありません」とよ、おそらくですが。如月町より武装し

た何者かが出立。一般人の報告が無ければ調べなかつた隠密性、下校時というタイミングから見て、狙いはほぼ間違いないという結論に達しましたわ」

息を呑む。

この市は、四つの町の力のバランスが釣り合つてゐるからこそ平和であり、その氣になれば本当に漫画や映画のような戦闘が起つたりうるのだ。

それが、彼らの元に向かつてゐる、氣が氣ではなかつた。  
怜哉にとって響玖と映恵は、自分から声をかけてようやく出来た本当の友人なのだ。

しかし、次の瞬間に一つの事に気づく。

「……いえ、空井が居れば大抵の相手は迎撃可能でしょう」

自分とは所属する「町」が違うが、空井の力とお人好しは知つている。

空井ならば敵が武装していようが、赤坂にも卯月にも気づかれずに排除する事が可能だらう。

「いえ、黒椿峰くろつばきのみねの方から彼女の帰還を確認したとの情報がきましたわ。彼女は護衛の事もなにも知らないのだから当たり前といえど当たり前なのでしょうけど」

再び、息を呑む。

彼女の所属する町、黒椿峰の機関から情報が来たのならそれは正確だろう。

「クソッ！……如月の奴らは何を考えているんだ！」

「同意ですね。平和が一番だというのに……無粋な連中ですわね」

怒りで顔を歪ませながらも、よく言ひ、と怜哉は心の中で失笑を一つ。

平和が一番などと、本当に考えているのなら怜哉のような人間は要らないのだから。

「…………次社長、やはり街中では…………」

「ええ、部隊は出せません」

予想通りの答えだが落胆する。

敵は如月の正規部隊のようだが、対するこちらは身一つだ。

その怜哉の失望を見て、鷹子は微笑を浮かべながら話しかける。

「大丈夫です」とよ。志乃崎は……まあ、あんな調子なので期待できませんが、黒椿峰は自分の領内で起こつた事だからと協力を申し出てくれました

そこで言葉を切り、続ける。

「後はあなた次第ですわよ 不必要悪」

その言葉に、仕事だという事を認識する怜哉。

小鳥遊株式総合会社対危険存在対策部非人道課、通称「不必要悪のあなぐら」

小鳥遊の私兵を囲う対危険存在対策部の中で、任務内での全ての外道と全ての悪逆と全ての残虐を許された非公式機関。

彼らの仕事は、社の利益のためならば任務に規定されていない限り

の全てが許される。

その非人道課の課長が怜哉だ。

「ふう……分かりました。」ちらりとしても助けない訳にはいきません。装備は頂けるのですか？」

「もちろん。情報の欠片すらも一切漏らさないとこいつのなら

無理だ、と怜哉は結論。

街中に出るかもしれない中、銃器火器は絶対不可、刃物やそれに類する物でも長いと怪しいし、短いならば持たない方がマシだ。如月町という相手ならば、人間よりも化物が出る可能性が高い。嘆息一つ、外に向かつて歩き出す怜哉。

「情報は端末に送つてください。俺はひとつとと済ませて学園生活を楽しみたいんです」

その後姿を見て、鷹子は呟くよつて、たえずるよつて、言葉をかける。

「うふふ……頑張つてくださいましね？ 私のための不必要悪。殺戮を破壊を残虐を非道を殲滅を悪逆を非道を、小鳥遊のために成しなさい」

その言葉に、歩調をまったく変えずに怜哉は答えた。

「了解、人道に在らぬ我が所業は全て貴女様のために」

\* \* \*

今さらなんだが卯月と居る時は注意しない

怜哉の言葉が頭をよぎるが、それはもう今さら考えても無意味な事の訳で……

俺と卯月さんは今、追われていた。

一人は緑色の髪の女、もう一人は青い髪の女、最後に黒っぽいが普通と少し違う髪の男。

なんだかファンキーでエキセントリックな見た目だが、やる事はマジらしい。

「卯月さん、こひちー！」

卯月さんの手を引き、俺は来た道を逆走している。

学園にさえたどり着ければ、とりあえずは安全なはずだ。

観た所銃とかは持っていないらしい。いや持つてる訳無いよなこの

法治国家、日本で。

「逃がさないであります」

青い女が先頭で走ってくる、速い。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、私達の、初めての仕事が、これっていうのは、ちょっと、嫌なんだけど……」

「…………」

が、向こうに向ひつて何か事情があるらしい。

緑の少女が抗議し、黒い男も肯定するよつに頷く。

「文句は受け付けないあります。父上に直接言えれば良かつたと出来の悪い子たちに進言しておくれあります」

あ、後ろの一人が震え上がった。なんかやつぱり先頭の奴が偉いんだな。

「とか考へてる場合じゃねえ！ 卵月さん、まだ走れるか？」

頷く卯月さんだが、息も絶え絶えで汗でびっしょり、とても無事そうではない。

……ここは仕方ないよな。

「ちよっとごめん、卵月さん！」

と、掴んでいる彼女の手を引き寄せ、握っていた手を首筋にずりしきてもう片手を太ももに、そのまま卯月さんの体を90度回転。お姫様抱っここの出来上がりだ、追われているのに彼女を背中側に晒すわけにはいかない。

そして俺は理性の塊なのでこんな事をしてもコロシマな考えは浮かばないので、多分。

卯月さんも顔を赤らめていたが文句は言わないから大丈夫だらう、喋れないからだってツツ「ミは当社サポートセンターまで

「逃がさないであります……」

つてうおおー？

ふざけてる場合じやない、アイツすげえ速い！ てかもうむしろ人間かー？

追いつかれる！ やばい！ もしかして俺の人生終わり？ こんな訳の分からん間に！？

「んつなの！ 許せるかアアあああああアーー！」

俺はまだ死にたくない！

映恵をもつとからかつてやりたいし、まだ怜哉相手に一矢報いた事も無いし、それに卯月さんとも仲良くなつてない。だから、こんな所で死んでられるか！

「ふむ、人間 それも一般人にしては良い動きであります」

速度を上げ、通学路の林の中に入る。  
これはいつも通っている学園の通学路、地の利はこっちにあるはずだ。

あるはず、だつた。

「しかし、それでもただの人間……」

耳元で、女の囁き声が聞こえる。

今日ほど人畜無害で利益皆無な自分の力を呪つた日は無い。  
自分に宿っていたのがもつと強力な それこそヒーローのような力だつたら戦えていただろうか？

……きっと無理だな、能力以前に俺が弱い。  
はは、なんだよ……俺は。

ただボーゲと過ごすだけで、何もしないで、しようとも思わないで

……

女の子一人すら、守れないじゃないか。

瞳を閉じる、覚悟を決めた。

ただ、胸の前に抱いた少女だけは、俺が倒れてからも走り出せるようになに降ろしておいた。

「我らには敵わないであります」

さつきからこれだけしか時間が経っていないのか、と自覚させる女の言葉の続き。

そこから先は全てがスローで見えた。

女の腕が俺の肩を掴み、引き寄せ、もつ片腕を握り締め、その腕が弾かれて、女の体が宙を舞い………って、え？

「や、響玖～、あせりや戻ってきたんが疲れたば～」

女と俺との間に、映恵が立っていた。

いつもの野球帽をかぶり、しかしその服装は若草色の着物である。

「え……つと、映恵、だよな？」

「こげな美少女、他に居るかや？」

「星の数ほど」

「そりゃねえや～

脊髄反射のように言葉を返した後、彼女が映恵だと再認識する。そして奥を見ると、もう一つ異変が起こっていた。

わざわざまで後ろに居た二人の「つち、黒っぽい男が居なくなっている。

「ま、あつちはあつちでやつとるひめ「ひ」とば

映恵が喋り、野球帽の上から頭をかく。

その仕草は、もう安全だと言つてゐるよつて思えた。

（ああ……映恵が卯月さんの時と同じくらい頬もしく見える……。

なんだ今日は、スーパー映恵タイムか？）

そんな事を考えながら、俺は再び卯月さんをお姫様抱つ。」。

ああ……なんか落ち着いて考へるとこれつていいなあ……理性？  
ナニソレ食えるの？

「まあ、映恵、そういうことでもう大丈夫なんだよな？」

「どうしてここに、とかなんでこんなに強い、とか聞きたい事は大量にあるが、とりあえず助か

「もう帰っちゃくれんかねえ、私もケンカは好きじやないベよ」

「いえ、私は、無抵抗の人間を、連れ去るのは、卑怯だと、思つていました」

つてねえ。

緑色の少女と映恵がなんだか激戦を繰り広げている。

人智を越えた限界バトル！ その果てに待つものとは！？ 韶玖先生の次回作にご期待ください つて感じだ。

……やばい、俺も変な事態でテンションが妙な方向に向かつているらしく。

「…………いやまあ、逃げないとな」

いやほらだつて今青い人が立ち上がつたし、映恵はドライブ ボールみたいな戦いしてて忙しそうだし……。

「状況、ほとんど変わつてねえじやねえか

\* \* \*

からか「うひうひうひ」。

右手の中で、拾つた石ころが音を立てる。

敵数は一、これ以上を引き受ける義理は無い。空井なり上手くやるだろうしな。  
さて、やるか。

「これより悪を執行する。遺言があるなら勝手に言え、祈る神がいるなら勝手に祈れ」

右足で地面を強く踏みしめ、左足を次の地面へ。

「 時間は『えんがな』

手の中にある石を一個、親指に乗せて弾く。

これが先ほども使つた手、林の中から攻撃が来れば奴らも分散せざるを得ない。

「…………

敵は無言、石ころを首の動きだけでかわす。とりあえずはやるよつだ。

だが、まだ戦い方が純粹すぎる。きっと実戦経験が浅いのだらう。そういう敵ならば、俺にとつてはいい力モだ。

ひとわし指の腹に一つ、石ころを乗せて親指で弾く。  
ここまでは順当だ。だが、それだけで終わるはずが無い。  
もう一撃、手の平の中から不意打ち氣味に中指で弾く。  
そして、ダメ押し。

「 っ！」

驚いた顔をした、俺が。

敵の肩がピクリと動く、悲しいかなどれだけ警戒していくても生物にはそういう生理的な反射がある。  
そして俺は、世間一般にはやるべきではない事 嘘や悪事を「ン  
マの迷いも無く実行する事が出来る人間だ。

よって、敵に一瞬の隙、こちらには一瞬の好機。

もう一つ、左手に隠し持っていたたつた一つの石ころを放つ。  
まだ、まだまだ罷は終わらない。

兆弾。

二発目は一発目よりも速く、同軌道上に放った。……つまり、この  
一つは針路上で激突する。

一発目は鳩尾、跳ねた二発目は右田こ、弾いた三発目は股間に向か  
つて飛ぶ。

全てが必殺の一撃、それ単体ではどうかは分からぬが、当たりさ

えすれば殺しまでつていく自信はある。

「…………」

敵は無言、だがかわす。

上手く見切れないようにフェイントだらけだったといつのに、それでも男は横転ぎみに左へとかわした。

本当、この動きは素晴らしい。

素晴らしい素直に動いてくれる。

もちろん、そこに在るのは最後の罠、つまりは俺自身。着地、受身すら取れぬ状況で奴のアゴを 跳り上げる！

「…………！」

敵は無言、しかしそのまま後ろ向きに倒れていく。  
からうじて体勢を立て直したようだが、形勢はこちらの方が有利だ。  
アゴに攻撃を入れるという事は、脳に衝撃を与える事になる。

「…………！」

不利を悟ったのか、敵は背を向けて走り出す。

「逃がすかっ！」

それをもちろん、追いかけはしたのだが……奴は木の上に一飛びで飛び上がり、そのまま枝を飛び移つて逃げていった。  
やはり、人間ではない。

見た目が人間で性能が違うか、人間をベースに一工夫えたものか

だ。如月町の研究者どもはそれぐらいやる。

「しかし……位置が分からんのでは追跡も出来ないな」

「そうだ、IJのままではアレが赤坂と卯月に追いつくかもしれないんだ。  
だが、どこの居るのかも分からない状況ではどうしようもない。」

とりあえず俺は、近くの林を探索する事にした。

\* \* \*

「邪魔を、しないで、ぐだむー！」

目の前の少女が、拳を放つ。

その拳は神速、プロのボクサーにも劣らないだらう。

「いやや、あん子らは私の友達じやけん」

しかし、それを掴む。

真正面から、神速を力によつてねじ伏せる。

「やつぱり、人間じや、ありませんね」

少女が今度は回し蹴りを脇腹に。

後ろに退いてかわしたが、それと同時に少女の手が開放される。

「んー、わたしや、河童かっぱだけさ。田舎から出てきたん

そう、自分は妖怪。人にあらざるもの。

黒椿峰は妖怪の駆逐だけではなく、友好的な妖怪の発展と保護にも努めている。

そういう訳で、私は黒椿峰の神社に下宿をせてもらっているのだ。  
……文が方言じゃない？ 心の声は万国共通だよ？

と、油断している暇はなかつた。

「……………びつして、帽子を、かぶつて、いるの、ですか？」

暇はあつた。

「びつやから少女は話すのが好きらしい。

「そりゃあな、河童の目ひゅうのは知つとるナ？」

「はー」

「ありやなあ、頭ん太陽当たつだらあかんから水でちょつことでも守つてる訳だあ。だから河童はなあ……」

一拍、間を空ける。

正直、この体质は先祖を怨むしかない。

「頭に光を浴びすぎると……目あ作るためにハゲるんじや」

「これのせいで……家の外では常に帽子着用……。

この年齢でハゲるのは嫌だ、年取つたら良いわけじゃないけど。

「やべ、ですか」

少女が少し気遣つたような態度を見せて、しかしその後一回りと笑つた。

「では、『きげんよ』」

「な？　ああ！？」

しまつた、話している間に立ち位置が変わつてた！  
しかも結構間を空けられてるし……逃げられたら、追いつけない。

「待たんかや、『ひりあー！』

「待ちません」

そして少女は林の中へ消えていった。  
追いかけはするが……最早追いつけるかどうかも怪しい。

(くつそー！　響玖は大丈夫かえなー？)

＊＊＊

指の先から文字を生み出し設置。

「馬鹿」とか「阿呆」とか神経逆なでするよいつな事を主として。

「…………」

そしてそれを放置。自分は別方向に逃げる。

まだ夕方だが林の中は暗い、文字が光になつて嫌でも目に付くだろ

う。

「.....」

暗闇から観察する限り、声こそ荒げないが女の表情はどんどん険しくなっていく。

初めはそんな事もなかつたのだが、塵ちりも積もればなんとやら、イタズラの基本だ。

「卯月さん……大丈夫？」

コクリ、と卯月さんが頷く。

とりあえず今は卯月さんに自力で走つてもらつてる、両手塞がると字が書けないし。

しかし……逃げながら書くのは疲れる。

「よし、もうこいつちよ」

次は「年増」。

人間怒ると判断力が鈍るものだ、本来ならここで膝かつくんでも仕掛けたい所だが、シリアスに逃げている状況ではさすがにやらない。と、そこで気づいた。

女の後ろから近づいてくる二つの影に。

(映恵ー！ 食い止めるんじやなかつたのかよー！？)

さすがに三人分の包囲からは逃げられない、俺のは見つからないからこそ意味があるのだ。

そして、三人による山狩りが始まった。

「あ、アハハ……」

俺たちはすぐに見つかった、しかもあの女に。

「……何か弁解があるなら聞いて差し上げるであります」

れつを聞いた女の声は抑揚が無い感じだが、今は氷のように冷たい。

「いやそらあのえつと、ねえ、そつちが追いかけてくるからじやあ  
」

「私たちは貴方に危害を加えるつもりは無かつたであります。用があるのはそちらの少女」

ちらり、と女は卯月さんを見る。

卯月さんはビクリと震えた。

「……卯月さんは俺の友達なんだ。何かあつたら助けるに決まってるだろ」

「いえ、すこし誘拐させて頂きますが危害を加えるつもりは毛頭無い  
いであります」

え？

じゃ、これって……え？ 無意味？ 折角逃げたのに……いや、でも誘拐つたら大事か。

「で、少年。……貴方は、私にしたことを見えているありますか？」

「あ、ハハハハハ……」

「さすがに少し怒りを覚えたので、一発だけ殴らせて頂くであります」

……殴られ損のくたびれもつけ？

つてあー！ なんかもう殴る姿勢になつてるよ！？ 結構腰はいつてるよ！？ 世界を狙えそくな良いパンチの予感！

「ちよいほんと「ひづ」めんこにあやまつますから つてグブアツー！」

殴られた。

ここまでならギャグで済んだのだらつ。  
しかし色々と誤算があつた。

女の力の強さ。

俺たちは逃げて、女は冷静さを失つて、場所に確認が出来ていなかつた事。

女の拳を受けた俺は、数m浮き上がり。  
そして、後ろにあつた崖から落ちた。

「…………え？」

最期だとこいつの、そんな間抜けな声しか出なかつた。

崖なんてあると思わなかつたのだから、せいぜい「いつてーー」で済むと思っていたのだから。

運悪く頭から、崖の下に落ちていく。

そして、俺は死ぬんだと思つた。

だつたら最後にと、手から力を発した。  
人畜無害で利益皆無のつまらない力、でも 居場所を伝える役ぐ  
らいには立つてくれ。

そして聞こえたのは自分の体が砂利をすべる音、骨の折れる音、頭  
蓋に響く音、それと

「！」

卯円さんが、何かを叫んでいたようだと思つ。

\* \* \*

私は、普通とは違つた。

私には能力があつた、能力の基準がなんのかとか下らない事を吹  
き飛ばすほどに特別すぎる能力。

私は、喋るだけで全てを思い通りに出来る。

人畜有害で利益大量、ただの一言で命すらも簡単に扱える力。

最初に気づいたのは、もつ物心ついた時だつた。

「遊んで」と言えば誰もが寄つてくる、「嫌い」と言えば誰もが遠  
ざかる。

しかしこんなものは自分が子供だからだうと思つていた、周りの  
人間が少し自分に甘いのだと誤解していた。

きちんと自覚したのは、小学生の頃。

「やめて」と言えばケンカは止まる、「やつて」と言えば誰もが手伝い。

初めは人望でもあるのかと思つていた。

しかし「死ね」と言つ事を言つてしまつたことが、一度だけある。それは本当になんでもない口げんかで、良くある田舎の一戸建てにいるはずだった。

しかし、言われた少女は本当に窓から身を乗り出していた。  
「やめて」と言えば、糸が切れたかのように動きを止めたが、後日それは問題になつた。

私が死ねと言つた事にショックを受けてそんな事をした、といつのが教師の意見だ。

教師も相手の親も怒つていた。

特に相手の親は私を殺さんばかりに睨んでいた。

それでも、「やめんなさい」と一言謝ると、誰もが許してくれた。

そこで子供の頃を思い起<sup>こ</sup>す。

あの雲、ゾウさんの形だあ。

それは、自分が望んだからそんな形になつたのではないか。  
このシャボン玉、割れないねえ。

それは、自分が割れるなど命じたのではないか。

ねえ、お父さんお母さん……

父母は、自分が望んだから優しいのではないか。

怖くなつた。

世界の全ての善意が怖くなつた。

何もなくなつてしまえばいいと、思つたことはあつたがすぐにやめ

た。

自分なら、本当に実行できるのかもしれないのだから。

そして喋るのを止めて、高校生にまでなった。

そこには、友達になつてくれる人が居た。

喋らなくても、善意を向けてくれる人たちが居た。

だから、私はさつきから「もういい」と言いたかつたのだ。

それさえいれば、彼は何事も無かつたかのように家に帰るはずだから。

でもなかなか言えなかつた、頭で分かつていても心がそれを許さなかつた。

でも、彼が崖から落ちたときは自然と声が出た。

おそらく、喋つたのは6年ぶりぐらいだわ。

私は叫んだ。

「死なないで」　　と。

\* \* \*

目が覚めると、そこは白い天井だつた。

「よお、赤坂」

怜哉の声がする。

怜哉は丸い椅子に腰掛け雑誌を つて

「それもう発売してたのか！？ つてか今日は何日だー！？」

「第一声がそれか」

怜哉は苦笑して本を置く。

「あ……やつか。色々と聞きたい事があるんだ」

段々とあの出来事を思い出す、崖から落ちたんだな……俺。

「ああ、とつあえずお前は片腕折つてる」

「ん？ うねおおおおおおー！」

良く見るといつは病院のベッド。

その上で、俺は右腕を固定されていた。

「まあ、救急隊員の人曰く生きるのが奇跡だと。喜べ」

「喜べって言われたってなあ……そうだ、卯月さんほー？」

思い出す、やうこええばあの女は卯月さんをひりひり言ひたはずだ。

「ギリギリ間に合つてとつあえず停戦した、奴らも本氣で狙つてい  
る訳ではなかつたらしい。……まあ、田印をありがとうと言つてお  
くぞ、赤坂」

「おひ。……って、なんで俺だってわかるんですかー…?」

確かに最後の力で大きい字を書いたはずだ、遠くからでも見えるようなものを。

しかし、何故こいつが俺の力だつて知っている?

「へへへ……俺の仕事がそういうの関係だつて言うのは知っているだろ? それぐらいは学校で監視していれば分かる」「

「マジか! お前の仕事ってオカルト関連で、本当に対策してるとは思つてなかつたぞ俺は!」

「ふつ、まあしかし『助ける』とはな。お前だけなら見捨てていた所だ」「

「仕方ないだろ、『て』よりも『ひ』のほうが書きやすかつたんだから

大きく書く場合は、最後に外に跳ねるより内に跳ねた方が書きやすいのです。

そこまで話すと、怜哉は何かに気がついたように顔を上げ、こいつ言った。

「まあ、後はおいおいな。……俺は邪魔する気は無いんで

怜哉が病室から出て行く、なんなんだ一体?

そしてそれと入れ替わるようにして……卯月さん!

「よ、卯月さん、無事そつて何より

折れていらない左腕を挙げて挨拶すると、卯田さんは申し訳無むれりに俯いた。

「あー、気にすんなよ？ なんか……あー、これは……」

一応、入院させた事に罪悪感を感じて居るのだらう。  
とつあえず、俺はしばらく卯田さんと話す事にした。

\* \* \*

彼は私を悪くないと呟つてくれた。

「ほり、友達なんだからさ、えへっと、今度なんかおじつてくれればそれでいいって」

彼の言葉はとても魅力的に思える。

赤坂君と近江谷君と空井さん、三人と一緒に遊べるのだ。  
みんなにはお世話になつた、次の日曜にでも財布が許す限りお皿でもおひるいと想ひ。

「で、卯田さん、もつ氣にしないで」

その言葉に、一つ頷く。

あの時は咄嗟だったが自分は本来喋つてはいけないのだ、それがそのまま世界に影響を与えるのだらう。

……でも、一つだけ不満がある。

それを改善するのは悪い事かもしけないけど、やつを良こ事をした

からあい」。

これで私は彼に貸しだけになる、気持ちよくおひこあづられそうだ。

息を少し吸つて、口を開く。

「姫紀つて呼んで」

赤坂君は近江谷君の事を「冷哉」と呼び、空井さんの事は「映恵」と呼ぶ。

だから、私だけ仲間外れなのは嫌だ。

「え？ あれ今喋ったのか？ おーい、ワンモアプリーズ姫紀ー」

次の瞬間、彼は極めて自然に「姫紀」と呼んでいた。

彼はなおも追求を続けたが、私は首を軽くかしげて知らないフリをした。

うん、これでいい、私のイタズラ終了。

「じゃあ、今度の日曜日、遊びに行こうぜ」

なにがじゃあなのか分からぬが、彼は私が思っていたのと同じ提案をした。

もちろん頷く、すると彼は目の前に手をかざし指を立てた。

「えへっと、じゃあ予定を立てるか」

どうやら能力をメモ代わりに使うようだ。

疲れると言つていたが、すぐに眠れる病院内なら大丈夫だろう。彼の手が揺れる。虚空中に文字が現れる。

その人畜無害で利益皆無な力は、私の人畜有害で利益大量な力よりもよっぽど綺麗で素敵に見えた。

(後書き)

はい、本編のキャラも絡みましたが、とりあえずこれで終了。  
彼らの次回の活躍は本編にて！  
何気に映恵はお気に入りだったりしますし（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9884d/>

学園奇譚 サイン

2011年1月5日09時13分発行